



え・小島サエキチ

「新米の百の神々おもてなし」 責任のやめよ

十月のテーマ 経営者も家庭人

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二二～一九九九）のこゝとばを掲載します。

# 責任のやめよ

**人** 間にとつて、もつとも大切なのは、自分が仕事を通じて、健全な社会の建設のために、どれほど貢献しているか、ということである。とくに父親は、この道をまっすぐに進む必要がある。

父親がそうした気持ちで、ひたむきに働くとき、その状態は妻である母親に影響し、わが子にも反映する。

父親がフラフラしていると、子どももフラフラするのである。父親の心意や行動は子どもに反映する。それは共にいる時間の長短に関係ない。

親と子は目に見えないところで深く強くつながりあっているのだから、子どもがみていないからといって、子どもに教えるべきしつけと反対のことを父親がしていると、それを目撃していないはずの子どもが、父親と同じことをいつのまにか行なっている。

わが子は見えないところで自分を見ている、わが子のいないところでも、わが子をしつけることができるという信念ではたらくのが

ほんとうだ。

またたとえ、仕事で忙しくわが子と接する時間が少なくても、たったひとこと、子どもに、「こうしなさいよ」と言っただけで、ピンと子どもに響くのである。いつも一緒にいて、くどくどと同じことを繰り返して言っているだけ、がしつけではない。

百の説教より一つの実行。百の注意より一つのすすめ。こういったことの方が、効果は大きいのだ。父親はほとんど実行しないので、くせに、母親のせいにして妻に子どもを叱らせるようなことは、もつとも下手な教育である。

子どもがほんとうに社会に尽くし、社会のためになる働きをする人間になるかどうか。他人になるべく迷惑をかけないような、しつかりした人間になるかどうか。その教育の責任の半分は父親にある。いや半分どころではない。すべての責任は父親にあると自覚するのが、まことの父親の愛情である。妻の欠点のすべてを抱き、暖かくわが家をつつむのが夫の愛情だ。

「いつさいの責任は自分にある」と大手を広げて受けて立つ。

そこに一家の愛和の基礎がある。こうした愛情をもって、職場においても、いつも子どもが見ているぞとの信念で働く。それがほんとうの父親なのである。

夫（父親）としては妻（母親）に責めを負わせないという度量と確信で、力いっぱいその日働きぬく。そこにあふれるような喜びが湧いてくるのではないか。そして子どものすること、なすこと、すべてわが責任であるから、「今日もしつかり勉強し、そして元気いっばいに遊べ」と、自分の仕事にうちこんでゆく。そこに何ともいえない生活の歓喜がにじみ出てくるのだ。

ドンと来い！ などという真骨頂は、そうしたところにある。世の父親たる者、もつとこの人生を力いっぱい活躍し、生きぬいていこうではないか。  
 （単行本『あなたは生命の元を見つけたか』より）